

氷見のヒミツの物語 西条市氷見

岡崎 直司

タウンツーリズム講座主宰・
近代化遺産活用アドバイザー



歩き遍路の喉を潤してきた芝井の水(お加持水)

西条市郊外に氷見という町がある。あまり知られていないが、魅力的な佇まいがアチコチに見受けられ、もっと知られて良い町並みの一つだ。この小さなエリアにかつては五つもの造り酒屋があったという事実にも驚かされるが、水の良さに加えて、ここは街道に目を向ければ物資集散の結節点だった事が分かる。つまり、東西に行きかう金毘羅街道に面して

それはお
四国の遍
路道とも
重なり、
南北方向



左石鉄山(いしづちさん)の道標

にも石鎚参詣の道がここで交差する。今では石鎚信仰の人々が毎日参詣するといふ場面には出くわさない為ピンと来にくい、かつては中山川河口にある新兵衛港に上陸した九州・中国あるいは関西方面から、相当数の善男善女が氷見を経由してお山に向かっていた。物資の方も、石鎚山系の材木や薪炭、紙の原料となる楮、ミツマタ、はたまた西条藩の新田開発による豊かな米の穫れ高など、町は殷賑を極めた。

今回お伝えするのは、教えたくないけど教えたい、そんな複雑な心境になりそうな町氷見のアレコレ。まず、飛び切り経済的に中心となったであろう二家が奇跡的に残っている。

【大庄屋高橋家】

見るからに他家とは一線を画すその構え、火の見やぐらを乗せた妻入りの堂々たる正面と背後には樹齢三百年と伝わる大銀杏も。大喜多屋と呼ばれるこの旧家は、天正の陣(1585年)で四国に

侵攻した小早川隆景により落城する高橋美濃守の末裔で、江戸期には名字帯刀を許され、三千石を有する氷見組大庄屋として繁栄した。伊予八藩

の中でも有数には違いなく、下世話な話となるが識者の試算では現代的に置き換えて年数億の上がりという説も。

【住吉屋森家】

もう一つ、この森家も別格な歴史を有する。住吉屋と呼ばれるこの宏壮な屋敷は、近年地元有志による「古民家研究会」によつて見違えるようになった。

こちらは藩政時代には加茂川以西、今治近郊までの土地を所有し、二千石の米を



住吉屋森家



氷見組大庄屋高橋家

産出したとされる。上納金や地域貢献が認められたものか、この家も名字帯刀が許され庄屋格で遇されている。石鎚街道に面した間口の広さは軽く50mを越え、式台形式の玄関や御成門が、自ずとその格式を物語る。

この御成門は森家でも近年まで使用せず、松山藩、西条藩、小松藩の各藩主がお成りの際のみ使用されたと伝わる開かずの門であった。



座敷濡れ縁から御成門方向を見る

平成28年次の調査で発見された棟札によれば、天保十二（1841）年の銘で「居宅七間半桁行十間半座敷迄」となっており、九代森直次の若い頃にそれまでの屋敷を改築したとされる。街道に面した南北方向の中央に玄関を配し、そこから東に棟を伸ばしたT字型の平面構成となっている。御成門は金毘羅街道に近い北側に位置するので、そこから直接庭と座敷に入ることが出来る。いつの頃からか水琴窟も設けられ、耳を澄ませば涼やかな音が聴こえる。

土間から建物内部に入らせて頂くと、右に左に更に奥へと20近くの部屋が連なり、時代劇にでも迷い込んだかと錯覚する。

襖や障子の間仕



採光の工夫・二段構えの障子

切りにより隔てられた部屋の暗さに対する工夫も見られ、天井まで障子を二段に構えた大きな建物ならではの採光箇所もある。この家に残る記録類で驚かされたのは、かの弘法大師の誕生寺とされる善通寺（香川県）の五重塔を再建建立するに当たり、この住吉屋が勧進元となつて資金集めに寄与した明治元年の文書。幕末期から着工され明治35年に完成を見たこの塔は、高さ43mもあり、国内3位。



善通寺の五重塔

そうした様々な信心の寄進によってか高野山には森家の墓所まであるというから、名家の響（なづ）はお大師さんのお墨付きがあるようなもの。住吉屋を語るにはとても紙幅が足りない。

【重森三玲の庭・越智家】

こちらは

石鎚酒造越智家の庭で

ある。三玲

は岡山出身

の昭和を代表する造園

家で、全国

約500もの歴史的な

庭を調査

し、自身も200の作庭をしている。その中の4つが西条市にあり、氷見には3

か所実在する。三玲の奥さんが氷見の越智家から出ており、そうした縁での事らしい。氏はイサムノグチに作庭指導した人物で、実はこの庭を案内した際の貴重な写真が越智家には飾られている。また氏が青石をよく使用している事なども、ひよつとすると度々この周辺を探訪した事に由来しているのかも知れない。



重森三玲の手になる越智家（石鎚酒造）の庭